

宮沢賢治童話における〈クマ〉

——他者として描くこと——

神田 彩絵

はじめに

現在、世界に生息するクマの種類はたった八種類である。しかも、そのうち六種類は絶滅の危機に瀕しており、クマを取り囲む環境は厳しいものと言える。^{注1}このうち、日本に生息するクマは、ツキノワグマ (*Ursus thibetanus*) の亜種・ニホンツキノワグマ (*Ursus thibetanus japonicus*) と、ヒグマ (*Ursus arctos*) の亜種・エゾヒグマ (*Ursus arctos lasiotus*) の二種類である。ニホンツキノワグマは、現在は本州と四国に幅広く分布しているクマで、首のあたりにある白い三日月模様が特徴だ。エゾヒグマは北海道に分布するクマで、サケを啜える木彫りの置き物でお馴染みだ。^{注2}こちらの種も森林性で、食性は草食寄りの雑食である。現代日本人はクマに対し、ヒトを襲う恐ろしい猛獣というイメージを強く持っている。クマが住宅街に出没したり、ヒトを襲った

りという話は毎年秋になると必ず世間をにぎわせる。環境省の調査によると、二〇二〇年は一月までの段階でツキノワグマの被害人数が一五〇人、うち二人が死亡、ヒグマの被害人数は二人が確認されている。^{注3}だがその一方で、我々はクマを、ステイベアなどぬいぐるみの代表的モチーフとして認識し、その愛らしさに癒しを感じているのだ。この相反するイメージを内包する不思議な動物は、イーハトーブでどのように描かれているのだろうか。本稿では、日本におけるクマ観の変遷に着目し、宮沢賢治童話におけるクマの特徴を明らかにすることを目的とした。

一 〈愛嬌〉の輸入

クマが登場する物語といえば、A・A・ミルン『Winnie-the-Pooh』を思い浮かべる人が多いだろう。ウォルト・ディズニー・カンパニー制作のアニメーションでも有名なこの児童小説は、クマのぬ

いぐるみでハチミツが大好きな「プー」と森の仲間たちの日常を描いており、日本でも石井桃子によって翻訳されて以降、現在まで広く愛されている。他にはラドヤード・キップリングの『The Jungle Book』（一八九四年）などが挙げられる。これらはイギリス人作家によって執筆されたものだが、イギリスに限らずヨーロッパでは、クマは物語の登場人物としてメジャーである。

ベルント・ブルンナーは、原初の時代から、クマはヒトと密接に関わってきたと指摘し、「雌の熊が母性の象徴として登場する物語^{注4}」としてギリシャ神話のおおぐま座こぐま座のエピソードを挙げる。

昔々神と人の国に、ジユピターといふ恵み深い王があつて、ジヌノーといふのが気だてのあまりよくない皇后であつた。

ところが海の女神カリストといふ、気だての至つてよい、美しい女神が、国王に愛せられて、アルカスが生れた。嫉妬心の深いジヌノーは大いに怒つて、カリストを熊にしてみつたので、カリストは人里離れて、山奥深く入り込んで行つたけれど、アルカスの事が常に気に懸つたが、自分の形が獣に変わつてゐるので、人里に出ることが出来ず、されど雨につけ、風につけ、アルカスの事のみ考へ、人里近くに出で、は、アルカスに会はんと思ふが、熊の形では、とても出ることには出

来んのを残念がつて居た。アルカスは五年、十年と経過する内に、成人して狩人となり、或日、山奥深く入り込み、大熊を見付け、よき獲物御座んなれと、弓に矢を番ひ狙を定めた。これを御覧になつた、恵み深いジユピターは、アルカスに親殺しの大罪を犯さしてはならないと、すぐに親子の者を天につれていつて、大小二匹の熊にした。^{注5}

ヨーロッパには、他にも「熊のジャン」などと呼ばれる異類婚姻譚が広く語り継がれている。クマが若い女性をさらひ、やがて二人は愛情を育む関係となる。そうして生まれた子どもは、父のように怪力で、母のように賢い。日本では、この型の物語として、ガブリエル・シュザンヌ・ド・ヴィルヌーヴ『La Belle et la Bête』（一七四〇年）が〈美女と野獣〉として有名である。このような民俗伝承は、ヨーロッパで、クマとヒトが近縁な存在であると信じられてきたことを示している。また、ネイティブ・アメリカンには、ヒトが変身した存在がクマであると信じる一族があり、ロシアにも、「最初の熊は森の精と、半分が人間で半分が動物の女との間にできた」とされている^{注6}。伝説がある。ヨーロッパを中心とする多くの国で、クマは獣性を強調されたもう一種類のヒトと見なされ、ヒトと比較して語られてきた。

だが、『Winnie-the-Pooh』などの童話に登場するクマは、伝説や

信仰のなかで語られてきたクマとは全く異なるルーツを持つ。ペ
ルト・ブルナーは、これをヨーロッパの特徴であると指摘す
る。

十九世紀のヨーロッパの人たちの熊に関する知識のほとんど
は、古い寓話やおとぎ話から得たものだ。こうした物語に描
かれている熊のイメージは実際の熊と整合している部分がほ
とんどないのだが、それでも人々が熊に対して持つイメージ
を形成してきた。寓話のほとんどはおそらく古代ギリシアの
寓話作家イソップ（前六一九―前五六四頃）によるものだが、
道徳的な教えを説くために動物が用いられている。こうした
物語の中で、知恵が働いてずる賢いキツネと対比する形で、
ぼんやりしていて騙されやすいキアラクターとして熊がしば
しば登場する。^{注7}

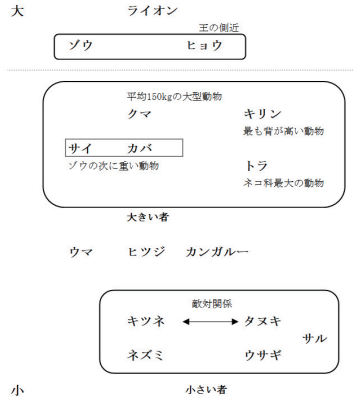
イソップ寓話は、一五九三年にイエズス会宣教師によって日本
に持ち込まれた。最初の翻訳本はローマ字によって書かれた『**OPONO FABLAS**』で、最も広く知られる翻訳本は、修身教科書
にも採用された渡部温『通俗伊蘇普物語』（一八七三年）である。^{注8}

ここに掲載されている、クマが登場する話は「第二十二 熊と狐
の話」「第三十六 旅人と熊の話」「第九十九 獅子と熊と狐の話」
の三話である。ここに登場するクマは、ライオンと喧嘩をしてい

る間にキツネに漁夫の利を取られるなど、確かに愚鈍な印象を受
ける。

また、アメリカで一九〇二年に発明されたテディベアも大きな
影響を与えている。これは、アメリカの二六代大統領、セオドア・
ルーズベルトの愛称であるテディを取って名づけられたクマのぬ
いぐるみで、当時のアメリカで一大ブームを巻き起こした。まる
で乳児のような愛らしいフォルムと手触りは時代を席卷し、クマ
は愛らしいというイメージを多くのヒトに植え付けたのである。
日本におけるテディベアブームは、金井正雄によると一九八〇年
代であるが、『赤い鳥』一四巻一号（赤い鳥社、一九二五年一月）
に掲載された細田源吉「くろい熊」に、黒いクマと白いクマの
「玩具」が登場する。テディベアという名称は知られていないまで
も、クマのぬいぐるみ自体は日本でも販売されていたと思われる。
こうした欧米の、ぼんやりしていて愛嬌のあるクマはイーハトー
ブのクマにどのような影響をもたらしたのだろうか。

イーハトーブのクマは、獣社会に所属する動物である。その社
会構造が描写されている作品は、「月夜のけだもの」「けだもの運
動会」の二作品で、ここから読み取れる構造は【図一】にあらわ
すことが出来る。獅子大王を頂点とし、その下に他の動物が体格
を基準として並んでいる。ライオンは、古来より百獣の王とされ



【図1】 獣社会のヒエラルキー構造

る動物であると同時に、文殊菩薩の乗り物でもある。また、釈迦の説法の比喻として（獅子吼）という表現もある。ライオンと並んでネコ科

弟子入りしようとするが、そもそもゾウの名前を忘れていた。そして、獅子大王に名前を聞き、ゾウの元へ向かった後も、鼻を引っ張られて鼻血を出し昏倒してしまう。彼は獅子大王からも「白熊はごく温和^マいからお前の弟子にならなくてもよからう。白熊は実に無邪気な君子だ」とその性格を評されている。「なめとこ山の熊」のツキノワグマたちは、自分たちを銃で狙う小十郎のことを愛するおらかな性格をしている。また、小十郎との問答のなかで、胆を胃袋と勘違いする場面は、クマの世間知らずな一面を強調している。

最大級の動物であるトラが「けだもの運動会」でその残忍性だけを強調され、ライオンの下に甘んじているのは、このようなエピソードが無いからかもしれない。

クマは大きい動物であり「洞熊学校」では先生を務めるなど、上位カーストに位置する獣だ。だが、クマは「点数の勘定を間違った」り「あんまりあたりが明るいために洞熊先生が涙をこぼして眼をつぶってばかりゐるたものですから、狸は本を見て書きました。」とカンニングを見逃してしまうし、結局、三人は先生から習った「大きいことがいちばん立派だ」という教えを実現しようとして破滅したことから、指導者は向いていない。「月夜のけだもの」のシロクマもぼんやりしていて、鼻を長く伸ばしたいと考えてゾウに

「ああ、おれはお前の毛皮と、胆^いのほかにはなんにもいらない。それも町へ持って行ってひどく高く売れるというのではないしほんとうに気の毒だけれどもやっぱり仕方ない。けれどもお前に今ごろそんなことを言われるともうおれなどは何か栗かしたのみでも食っていてそれで死ぬならおれも死んでもいいような気がするよ」

「もう二年ばかり待ってくれ、おれも死ぬのはもうかまわなようなもんだけれども少しし残した仕事もあるしただ二年だけ待ってくれ。二年目にはおれもおまえの家の前でちゃんと死んでいてやるから。毛皮も胃袋^いもやってしまうから」（ルビ引用者）

「氷河鼠の毛皮」で、クマたちがヒトに化けたホッキョクグツネの「赤ひげ」をスパイとして汽車に送り込んだことも、イソツプ寓話におけるクマとグツネの関係を想起させる。以上から、イーハトーブのクマには、欧米で見られるクマのぼんやりしていて愛嬌のあるキャラクターが流入していると言えるだろう。

二 タブーとマタギ

さて、欧米のクマイメージとイーハトーブのクマイメージの共通性について考察を進めてきたが、これは近代以前の日本では見ることができない特徴なのだろうか。実は、日本の民俗伝承や物語のなかでクマはほとんど活躍していない。山崎晃司は「日本の昔話や童話を振り返っても、オオカミ、グツネ、タヌキは頻繁に登場することは対照的に、ツキノワグマはあまり姿を現さない。いつてみれば、霧のなかの動物である。」^{注10}と指摘しており、赤羽正春も「動物昔話として熊はその地位を確保できないほどに少ない」と同様の指摘をしている。日本でクマが登場する有名な物語としては「金太郎」が唯一挙げられるが、ここでのクマの役割は山姥の子どもである金太郎の怪力を強調する点に限定されている。『日本古典文学大辞典』の〈熊〉から始まる項目にも、クマが登場する作品は見当たらなかった。ことわざもほとんど見られない。『聴

耳草紙』（三元社、一九三二年）に収録されたクマの話は「八七番 兎と熊」のたった一話である。話がかなり長いため引用は割愛するが、その内容は『日本昔話大成』（角川書店、一九七八―一九八〇年）で「三二 勝々山」に分類される話型である。ウサギとともに登場するクマは、有名な話型のタヌキのポジションにしている。ただ、タヌキとウサギの話型が、タヌキの非道な行いに對するウサギの復讐であるのに対し、「八七番 兎と熊」では、ウサギの行動に動機が無い。クマは、不運にも意地悪なウサギの標的にされ、何度も酷い目に遭い、最後には殺されてしまうのである。『日本昔話大成』に収録された話は七話だが、うち五話は、東北地方の一部の地域のみで語られているパターンであり、定型にクマが登場する二話ほどどちらも『聴耳草紙』と同じ話型である。

この、クマが語られない謎について、赤羽正春は興味深い指摘をしている。

ここで思い出されるのは、熊獲りの名人といわれる人たちに聞き取り調査で何度も伺っている際に、一度として奥さんが同席した事実のないことである。生業の調査では婦人の方の方が良い語り手になることが多く、できる限り男衆と共に同席いただいで聞き取り調査をすることが多い。ところが、鳥海マタギのシシオジである金子長吉は、私を家の中に入れて、

婦人のいない作業小屋の前で熊の話をしてくれた。薦川の小田基太郎にも同じことが言える。(中略)

奥三面の小池善茂は、寒中に熊の話をしてはならないという話を教えてくれた際、ふだんから無闇に熊について話題とすることは厳しく戒められていた現実を語ってくれた。子供たちも聞いてはならないものとしていたという。

つまり、熊については昔話で語ることがなかったのではなからうか。滑稽話にしても報恩譚にしても、語ることも自体が熊に失礼にあたったのではなかったか。^{注12}

このような、クマを語ること自体をタブーとする文化は世界中で見られる。ヘルント・ブルナーは「正義を維持する森の支配者、あるいは最高権力者の息子として崇拜されていた(中略)「熊」という言葉そのものを使うことが身の程知らずと見なされ、それゆえにタブーとされていた(中略)シベリアのケット人は「毛皮をまとった父」、「鉤爪を持つ老人」、「美しき獣」(中略)同じくシベリアのサモエド族は「親父」と呼び、エストニア人は「幅広の足」、カルパチア地方のフツル人は「叔父さん」、もしくは「毛むくじやらの奴」(中略)スウェーデンでは「老人」、「黄金の足」、「十二人力の獣」などと呼ばれていた。」^{注13}と、敬意によってクマをクマと呼ばない文化を紹介する。ただ、日本ではマタギの他は、

畏敬というよりも、口に出すのも恐ろしいというような(畏怖)をクマに抱いていたようである。次に挙げるのは、『古事記』^{注14}の中つ巻、神武天皇の東征の条である。

神倭伊波礼比古命は、男水門からお廻りになって、熊野村に着いた時に、大きな熊が草木の中から現れ入り消え失せた。すると神倭伊波礼比古命は、突然に毒気に当てられて病み、また兵士たちも皆正気を失って仆れた。この時に熊野の高倉下、これは人の名であるが、一振りの大刀を持ち、天つ神のご子孫である神倭伊波礼比古命が臥せていらつしやるところをやつてきて献上すると、天つ神のご子孫は悪気から醒め起きて、「長い間眠りこんでしまったなあ」と仰せになった。そしてその大刀をお受け取りになると、その熊野の山の悪しき靈威を振るう神は、大刀の威力によってすべて切り倒された。同様に病んで気を失っている兵士たちも、全員醒めて起き上がった。

これは、神倭伊波礼比古命(神武天皇)率いる兵団に抵抗する、熊野村の現地勢力をクマに仮託した表現であるが、関口明は「大和に征服された古代人のなかにはクマを「荒ぶる神の化身」、あるいは「畏怖」の対象とする宗教意識があったことがうかがえる。」「熊野村ではクマが外敵(カムヤマトイワレヒコノ命)の侵入に対

してそれをささぎる呪術的な力を持つていると信じられていた。

このようなクマに対する信仰は列島統一の過程で地下に伏流したと考えられる」と指摘する。日本国を建国したとされる神武天皇

が氣を失うほど、強大な力を持つ神としてクマが恐れられていたとすれば、クマを語ること自体が忌避されたことも頷ける。つまり、近代以前の日本人の根底にはクマに対する恐怖があり、かつクマと関わるヒトは狛師に限定されるため、一般には馴染みがない。そして、クマに関わる狛師たちは語ることをタブーとする傾向が強かったために、民俗伝承がほとんど見られないのである。

さて、クマと関わることを許されてきた狛師にとつて、クマは最も大きく恐ろしく、かつ魅力的な獲物であった。長澤武は「クマ（ツキノワグマ）の毛皮であるが、こちらも綿毛の多い点ではトップクラスで、保温性に富み、加えて黒光りのする毛は水をはじき、ノミを寄せつけない上、大きさも申し分ない大きさなので、動物としては最高級とされている。（中略）江戸時代になつても、各藩で、組したへ熊皮の上納を求めた文書が各地に残つていて、古くから貴人や高級官僚が動物として用いていた記録がある」と指摘する。また、熊胆（クマノイ）は古くから万能薬とされており、「切り傷、打身、火傷、歯痛、腫れものに患部へつけるほか、乾燥させたものを食あたり、胃腸病、下痢止め、二日酔、解熱、

食欲不振、眼病、肺結核、高血圧、神経痛などの薬として飲む」という。『本草綱目』（錦章図書局石印、一八八五年）にも、「熊胆

苦入心寒勝熱手少陰厥陰足陽明經藥也故能涼心平肝殺虫為驚癩瘡

忤斃障疔瘡虫牙虻痛之劑焉」(熊胆は苦くして心に入り、寒は熱に

勝ち、手の少陰、厥陰、足の陽明の經の藥である。故に能く心を

涼し、肝を平にし、虫を殺すのであつて、驚癩、瘡疔、斃障、疔

瘡、虫牙、虻痛の劑である。)と同様の効果が記載され、また偽物

が多く流通したことから見分け方も記されている。熊胆はかなりの

高級品で、山崎晃司は「干し上げた胆囊一グラムが純金一グラムと等価とされるほどの高い市場価値をもつ」と指摘している。

現代でも漢方薬局などで取引されており、石原明子の調査による

と、一九九七年の段階で「価格は1gあたり1、600円から1

0、500円、1gあたりの平均価格は6、697円」であつた。

狛師は、一頭で一か月ゆつくり過ごせる大物を求め、命がけで山

へ入つたのである。

ただ、狛師にとつてクマとは単なる金となる木ではなく、神聖

な山の使いでもある。そのため、狩りには多くの儀礼が付いて回

る。

飯豊山麓や朝日山麓そして秋田森吉山の熊狩り衆は、熊を獲

ると、参加者全員が集まり、勝鬨（ヨロコビオゴエ）を上

げて熊の魂を送る儀礼に取りかかる。秋田でケボカイといい、新潟でサカサカケという。熊を北（秋田マタギ・福島）や東（山形・新潟・福島）、川上（奥三面）などに向けて仰向けに寝かせ、皮を剥いで熊の霊を送るサカサガケを行なう。次に腹部から内臓を取り出す。この時、大量の血や内臓のまわりについていた脂身が出てくる。血を一カ所に集めて、皆で呑む。大腸を取り出して詰まっているものを足でしごいて中を抜き、空になった大腸に、残った血と脂身を詰める。胆嚢を取り出して胆管を紐でしばり、熊胆を作るために軟らかいものにくるむ。心臓を取り出して十字に切れ目を入れて山の神に捧げ、臍臓を取り出して火に焙り、弾ける方向を見て、次の狩り場の占いをする（富山から新潟にかけて）。などの一連の儀礼が行なわれる。熊の魂を送ってしまった後は、熊の首筋、尻、背中の部分の肉を切り出して、串に刺して焼き、里への土産とするモチグシ・七串焼きなどの儀礼を行なうところもある。^{注20}

赤羽正春の取材した儀礼は、集落ごとに多少の差異はあれど、クマの魂を送り、山の神へ供物としてクマの一部を捧げ、里に帰って肉は余すところなく消費し、毛皮や熊胆は売り物とする、という大まかな流れが共通している。これは「動物送り儀礼」^{注21}と呼ばれる

れるもので、「その動物の豊漁を期待して、殺したことを謝罪し、その魂を天国に送り地上への再来を願うための儀式」^{注22}である。この儀式のなかで、（クマ送り）は、狩猟の難易度の高さから最高位とされている。アイヌ民族の行うクマ送りの儀式・イオマンテは、「山で生け捕ってきた子グマを数年間飼育し、それを祭りのなかで殺す」^{注23}かなり大がかりなものである。

すでに花部英雄^{注24}らによつて指摘されている通り「なめとこ山の熊」の小十郎は、この儀礼を執り行っている。

それから小十郎はふところからとぎすまされた小刀を出して熊の（顎）のそこから胸から腹へかけて皮をすうつと裂いて行くのだった。それからあとの景色は僕は大きらいだ。けれどもとにかくおしまひ小十郎がまつ赤な熊の胆をせなかの木のひつに入れた血で毛がぼとぼと房になった毛皮を谷であらってくるくるまるめせなかにしよつて自分もぐんなりした風で谷を下つて行くことだけはたしかなのだ。

語り手の「僕」が「大きらい」と言つて語ることを拒否する場面でクマ送りが執り行われており、小十郎は山の神の許しを得てクマを獲っている。よつて、「小十郎はびつたり落ち着いて樹をたてにして立ちながら熊の月の輪をめがけてズドンとやるのだった。すると森までがあつと叫んで熊はどたと倒れ」と、森が叫ぶ

ときは猟が成功し、鉄砲の音が「びしゃ」と頼りなく森が叫んでくれなかったとき、小十郎はクマに殺されたのだ。

このように、小十郎とクマの関係は、狩る者と狩られる者であるが、二者の間にはそれ以上の絆がある。これは「氷河鼠の毛皮」の船乗りとホッキョクグマの間にも見られる。イーハトーブのクマたちは、彼らの住む森や林、そして雪原を出ることはない。だが、境界を越えてやって来る、命を奪うことの責任を背負い猟（漁）を行うヒトは、隣人として受け入れるのだ。こうした絆を、猟師がクマとの間に感じることはしばしばあるようで、マタギの金子長吉がクマに対して絆を感じていることが、次のように取材されている。

「二日前に熊が来てよ、うちの栗の成り具合を見ていった。今年はずナもミズナラも実をつけていないからな。秋に食べる栗の様子を見て回っているんだ」。

どうして熊が来たことがわかったのか、という野暮な質問はできなかった。長吉は熊の気配がわかる数少ないマタギなのである。「犬が鼻を立ててじっと数を見ているんだ。笹がわずかにカサカサ鳴ったから。挨拶して帰ったわ」。

家のまわりにある栗の巨木は毎年多くの実をつけ、冬の貴重な糧となっている。スナグリ（乾いた砂に埋めて保存する）

やコノハ詰め（一斗缶に乾いた木の葉を敷き詰めて保存する）で保存している。ところが、今まで熊はこの栗の木に登ったことがないという。鳥海マタギの長老である長吉の栗の木に登る熊は礼を失する。そのことを長吉は私に伝えたかったのであろうか。^註

「なめとこ山の熊」のツキノワグマたちは小十郎のことが大好きである。だから、小十郎の死体を囲んで葬儀を開き悲しみに沈む。この場面は、野本寛一が「マタギの、熊の霊送りの陰画ともいえよう」と指摘するように、クマ送りになぞらえたものとして読まれてきた。だが、それは描写されている葬儀の形式に囚われているのではないだろうか。クマ送りには確かにクマの魂を慰撫する目的もある。だがその本意は、クマの豊猟を山の神に願う儀式である。テキストのクマたちがヒトをもつと恵んでほしいと願う訳もない。彼らが行っているのは、あくまでも別れを悲しむ葬儀なのである。ただ、形式がクマ送りに似ていることはただの偶然ではない。この違いについて、花部英雄は「小十郎の命を熊の犠牲にすることによって生命の尊さを示し、生命の殺戮を否定する賢治の理想を示したもの」と^註と見ているが、果たしてそうだろうか。これは、ヒトとクマの間にある決して埋まらない（溝）の表出なのではないか。

クマたちの間に、豊猟を願って儀式を行うという文化があったとは思えない。そんなクマたちが、小十郎が山でクマを獲るたびに行う一連の儀式と、小十郎の「ぐんなりした」様子を見たらどう思うだろう。彼らはそれを、ヒト社会の葬儀形式だと誤認したのではないだろうか。つまり、クマたちは、ヒト社会の文化に則って、小十郎を用いてやったつもりでいるのである。中村晋吾は、この異種同士の交流によって明らかになる溝を「断絶」と表現する。

賢治童話の中で様々な物語を展開する人間、動物、植物、鉱物……といった無数の登場人物たちの間には、表面上の会話は成立する場合が多い。しかし、それらがおのおのに特有のやり方で何かを表現しようとするとき、途方もつかない齟齬が生じてしまう。

賢治童話に通底する擬人法には、このような両義的な性質がある。それは、本来結びつくはずのない異種の間を結びつけつつ、最終的にはそれらの間の断絶を強調しないでは終わらない^{注28}。

葬儀のつもりが豊猟の儀式だった、という結末はあまりにも切ない。だが、同時にそこには、小十郎とクマの間に結ばれた絆はつきりとあらわれるのだ。

三 信仰から管理へ

かつて、日本人とクマの間にあった信仰は、時代が進むにつれて少しずつ廃れていく。そして、開国と博物学の流入によって、これは一気に加速した。その証拠に、古典に登場しないクマは『赤い鳥』では繰り返して語られている。次の表は、広島市立図書館による「赤い鳥」総目次^{注29}にまとめられている一万九百九十七作品（表紙、挿絵、口絵を含む）から〈熊〉〈くま〉がタイトルのなかに含まれ、かつクマが登場する童話をまとめたものである。鈴木三重吉主宰の『赤い鳥』は、一九二八年の休刊までに二二巻、通号一二七号、復刊後は二二巻、通号六九号を出版しているが、表の巻号を見ると、一九二二年・二三年の間を除いて、コンスタントにクマの話が掲載されていることが分かる。このころにはすでに、クマは児童向けのコンテンツとして消費される存在となっている。これは、明治時代に始まった動物園、そして一六世紀にシベリアから産業として起こり、一九世紀前半に動物の絶滅危機種数が増加するまで発展し続けた毛皮貿易が大きな原因である。これによる信仰風化とタブーの破壊という流れはイーハトーブにも訪れており、クマたちの神性は剥がされつつある。「氷河鼠の毛皮」のホッキョクグマたちは、毛皮を求めるヒトの乱獲に対し激

【表】『赤い鳥』掲載のクマ童話

巻	号	発行年月	作品名	作者名	ページ	内容
1	1	大正7 (1918) 年7月	二匹の子熊	峰嶋不二子	72	投稿 (作文・綴方)
1	5	大正7 (1918) 年11月	白熊	岩松正	71	投稿 (作文・綴方)
1	6	大正7 (1918) 年12月	大熊中熊小熊	佐藤春夫	30-33	文
2	1	大正8 (1919) 年1月	熊	久米正雄	62-67	文
3	6	大正8 (1919) 年12月	熊	浦松佐美太郎	29-30	投稿 (自由詩・童謡)
4	1	大正9 (1920) 年1月	毒の大熊	鈴木三重吉	28-37	文
5	4	大正9 (1920) 年10月	良い熊、悪い人間	菊池寛	42-45	文
6	1	大正10 (1921) 年1月	菓鐘熊	江口渙	32-41	文
6	6	大正10 (1921) 年6月	不思議な熊	野上弥生子	66-69	文
7	1	大正10 (1921) 年7月	不思議な熊	野上弥生子	48-55	文
7	2	大正10 (1921) 年8月	不思議な熊	野上弥生子	36-41	文
7	3	大正10 (1921) 年9月	不思議な熊	野上弥生子	60-63	文
7	5	大正10 (1921) 年11月	熊虎合戦	宇野浩二	20-29	文
13	2	大正13 (1924) 年8月	大きな白熊	小野浩	44-49	文
14	1	大正14 (1925) 年1月	くろい熊	細田源吉	46-53	文
16	5	大正15 (1926) 年5月	熊と狐	小野浩	60-65	文
18	3	昭和2 (1927) 年3月	熊と車掌	木内高音	50-57	文
18	4	昭和2 (1927) 年4月	熊と車掌	木内高音	112-117	文
19	6	昭和2 (1927) 年12月	熊とピストル	吉田絃二郎	116-125	文
20	2	昭和3 (1928) 年2月	熊と狼との角力	上司小剣	32-37	文
4	2	昭和7 (1932) 年8月	熊	新美南吉	97	投稿 (自由詩・童謡)
5	2	昭和8 (1933) 年2月	熊	門馬孝男	83-87	投稿 (作文・綴方)

怒している。「なめとこ山の熊」の荒物屋は、小十郎からクマの皮を破格で買い叩く。そこにはすでに、クマに対する畏敬はない。

「月夜のけだもの」の原稿一枚目には、「上野の動物園の看守をしていた」という一文が書かれ、消された痕跡がある。その東京都恩賜上野動物公園（以下、上野動物園）では、開園当初からクマが公開されていた。小宮輝之によると、北極のクマがホッキョクグマと呼ばれるようになったのは、ドイツ人商人のハーゲンベックから送られた、ベアのホッキョクグマが到着した一九〇二年以降である。それ以前に上野動物園で飼われていた白いクマは、シロクマと呼ばれていた。従って、テキストの「白熊」の種類は判然としない。

最初の白熊は一八九一年八月十五日に上野動物園に寄贈された。この白熊は北海道北見国宗谷郡猿払村字ヒネシンのベガというアイヌに飼われていたヒグマのアルピノで、この年の四月下旬に山中で黒い兄弟といっしょに捕獲された当歳の子熊であった。子熊を一〇カ月育てて、イヨマンテと呼ばれる熊祭りのさいに生け贄として使うのが、アイヌのしきたりである。この白熊も特別にめでたい霊獣として、アイヌの敬う神に召される運命にあった。ところが、この白い熊を見た開拓使の役人たちは手放すのを嫌がるベガを説得し、二五

円の大金で譲り受け、明治天皇に献上したのである。

二番目の白熊は一八九九年三月二十五日付けで東宮職より「洋犬レヲ号と黒白熊児下付」の通知があり、イヌ一頭とツキノワグマの白い個体と黒い個体が三月二十七日に送られてきた。この御下付動物について五月十日付けで産地について問い合わせたところ、イヌがドイツ産、クマは新潟県草倉銅山（元東蒲原郡阿賀町。一九一四年〔大正三年〕廃山）付近において古河市兵衛により捕獲されたものという回答を受けている。一九〇二年発行の『上野動物園案内』には「日本ぐま（熊）が二頭居るが其の内黒色なのは普通のもので、白色なのは俗にしらこというて病的に皮膚が変したのである」と解説がある。このアルビノのツキノワグマもヒグマのアルビノと同じように黒い兄弟といつしよに捕ま^{注30}っている。

動物園にとってクマ（特にシロクマ）は、日本に生息する最大の猛獣で集客率に直結する重要な動物であったため、かなりの手間をかけて収集していたようである。クマを檻に入れて管理し、それを大衆が鑑賞するという図式は、これまでの日本人とクマとの関係を根底から覆した。日本人のクマへのまなざしは、大きく変わるこ³⁰となつたのだ。

毛皮貿易は、当然ながら北極にほど近い地域で盛んであり、動

物の乱獲による絶滅危惧種の著しい増加は、現在まで尾を引く大きな問題である。「氷河鼠の毛皮」には、毛皮貿易の発展に大きく寄与したシベリア鉄道と重なる機関車など、ロシアを中心として発展した毛皮貿易そのものを意識させる要素が散りばめられているが、その舞台は凍り付いたベーリング海である。ベーリング海沿岸には、一九世紀初めから、ロシア・アメリカ会社が毛皮貿易を独占したことで繁栄を誇ったアラスカがある。紳士のタイチが嵌めている指輪が、わざわざ「アラスカ金」と説明されていることから、クマが憤る乱獲は、特にアラスカ周辺の毛皮貿易が意識されていると分かる。毛皮貿易の一大拠点における動物たちの怒りは、想像に難くない。また、「なめとこ山の熊」も、「金天狗」——天狗煙草が登場することから、岩谷商會が販売開始した一八七七年以降のナメトコ山が舞台と推定が可能である。「なめとこ山の熊」には、猟師とクマの関係だけではなく、隆盛を極める毛皮貿易もテーマとして潜在している。

イーハトーブのクマは、神聖な動物から人間に管理される動物になつていく過渡期にあつた。そしてそれは、何よりもイーハトーブ童話として語られることによって、証明されているのだ。

四 拮抗する力

クマの恐ろしさを知らない現代日本人はいないと言っているだろう。クマのニュースは毎年必ず取り上げられるし、ほとんど毎年何人かが死亡している。二〇二〇年のクマ被害者数はすでに述べた。だが、このような日本人のクマに対する恐怖心は、文化的特徴らしい。ペルント・ブルンナーは、「日本文化は熊を容赦なく狩りの対象とすべき怪物と見なしてきている」と指摘する。^{注31}

クマの恐ろしさを世間に知らしめたものの一つは、吉村昭の小説『熊嵐』（新潮社、一九八二年）である。これは、北海道の苦前を襲った日本史上最悪の人身事故、三毛別熊事件を題材とした小説である。三毛別熊事件は、一九一五年二月九日〜一四日にか



【図2】『熊嵐』表紙

けて、北海道苦前郡苦前村三毛別六緑沢で発生した、エゾヒグマによる複数回の民家襲撃事件のことである。

その被害者数は、木村盛武によると「臨月の胎児を含めると、結果的に一連の死者は八人、重傷者は二人」^{注32}である。事件は、問題のクマが射殺されることで終息したが、クマをおびき寄せるために食い荒らされた遺体が使われるなど、その戦いは壮絶を極めた。しかし、この凄惨な事件は、当時はほとんど話題にならなかったようである。木村はその理由を、一八七八年に同じく北海道で起きた丘珠事件の影響と指摘する。

わが国熊害史上、三番目の惨事である丘珠事件がこのように名を馳せたのは、(中略)胃中から出た被害者の遺体が丁重に保存され、加害グマを剥製として残し、しかも、これらが長い年月広く公開されてきた経緯によるところは大きい。

ことに、明治天皇の天覧は、北海道民にヒグマ事件の残忍性を深く印象づける結果になった。こうした人身事故の天覧は、今日といえども、異例中の異例といえよう。

残念なことに、苦前事件では、新聞報道以外に信憑性ある事件記録も物的証拠も、残されていなかった。さらに、丘珠事件は、大都市札幌に隣接するという地の利を得たが、苦前事件は道北西僻遠の、一寒村三毛別の六緑沢で起こった。(中略)

かくして苦前事件は、丘珠事件の陰に埋没した、と言って

も過言ではあるまい。^{注33}

「明治天皇の天覧」というのは、一八八一年に明治天皇が行った、東北地方と北海道を巡る行幸のことである。これは連日新聞各紙で報道され、九月二〇日の『朝野新聞』には、一行が八月二八日に青森を出発し、三〇日に手宮港に到着、北海道に上陸したと記載があり、^{注34}九月二四日の同新聞では、九月一日に「農学校へ臨御生徒事業の景況及博物場展列品を天覧あらせられ」たと報じられている。^{注35}この「農学校」は現在の北海道大学の前身である札幌農学校であり、天皇は現在の北海道大学植物園を訪れたということだ。宮沢賢治も、引率の教師として、一九二四年の修学旅行で北海道を訪れた際には、この植物園を見学している。^{注36}また、恐らく丘珠事件のことであろうと思われる内容が含まれた作文「白熊」が『赤い鳥』に投稿されている。

ほくかいだうで熊が人をつかまへてたべようとしたことがあった。^{注37}その人の子がおこつて熊をとつたといふお話もきいた

この作文の著者である少年は、動物園のシロクマを眺めたエピソードとともに、この話を思い出している。「丘珠事件」のあと、ライオンやトラが生息しない日本において、クマは最も恐ろしい人肉食の猛獣として、広く認識されることとなったのだ。

こうした特徴はイーハトーブのクマにも見られ、彼らはどんな

に愛嬌のあるキャラクターをしていても、その牙も爪も鋭いままである。「なめとこ山の熊」で小十郎に牙をむいたクマが「殺すつもりはなかった」と発言するシーンは、クマの凶暴性を象徴的に表現している。「氷河鼠の毛皮」のクマたちも、鉄砲を携えてヒトを脅す存在として登場する。イーハトーブにおいて、クマとヒトの関係は、簡単に逆転しうる危うい力関係の上に成り立っているのだ。ベルチャ・アドリアンは、「なめとこ山の熊」「氷河鼠の毛皮」の狐けんの関係に着目し、「自然側が搾取されるばかりというのは様々な形で賢治の他作品にもみられる環境崩壊の問題であるが、この物語の背景にもある」と述べ、^{注38}自然側、つまりクマを搾取されるだけの弱者と読んでいるのだが、実際は、この二者の力は拮抗している。クマは、神性を失いつつある世界でもヒトに對抗する力を有する唯一の動物として、イーハトーブで描かれているのである。

おわりに

イーハトーブにおいて、畏怖と愛嬌という、相反するイメージを併せ持つ存在として語られるクマは、ヒトとの間に唯一と言っている緊張関係を抱えている。これは、互いの境界を越える行為が、お互いの生命を脅かす危険性を孕むことが要因である。つま

り、イーハトーブにおけるクマは（他者）であり、決してヒトの延長線上で語られる擬人化された存在ではないのである。彼らは彼らの論理で、ヒトはヒトの論理でコミュニケーションを取ろうとする。従って、ヒトとクマの交流には必ず摩擦が起きるが、同時に他者であるからこそ、絆を結ぶことができるのである。

日本の民俗伝承でほとんど語られない存在でありながらイーハトーブ童話で繰り返し語られる生き物としては、クマの他にアリモ挙げられる。彼らのイーハトーブにおける特徴についての考察は今後の課題としたい。

注

- 注1 坪田敏男 他『日本のクマ ヒグマとツキノワグマの生物学』（東京大学出版会、二〇一一年）
- 注2 自然環境研究センター 編『自然環境保全基礎調査 動物分布調査 日本の動物分布図集』（環境省自然環境局 生物多様センター、二〇一〇年）
- 注3 環境省自然環境局野生生物課鳥獣保護管理室「クマ類による人身被害について「速報値」」<https://www.env.go.jp/nature/choju/effort/effort12/effort12.html>（二〇二一年一月一七日最終閲覧）
- 注4 ベルント・ブルンナー 著、伊達淳 訳『熊 人類との「共存」の歴史』（白水社、二〇一〇年）
- 注5 水野千里『固定教科書「星の話」解説』（警醒社書店、一九二二年）

注6 注4に同じ

注7 注4に同じ

注8 府川源一郎『ウサギとカメ』の読書文化史 イソップ寓話の受容と「競争」(勉誠出版、二〇一七年)

注9 金井正雄『おもちゃの歴史』（「循環とくらし」四号、廃棄物資源循環学会、二〇一三年三月）

また、一九八〇年代にテイビアアの時代が日本で始まります。

今でこそ、子どものためのぬいぐるみですが、当時は高度成長期に海外旅行を自由に楽しむ若い女性が増えはじけると、欧米でテイビアアに出会った女性たちが求めたことがきっかけでした。

注10 山崎晃司『ツキノワグマ すぐそこにいる野生動物』（東京大学出版会、二〇一七年）

注11 赤羽正春『ものと人間の文化史 144・熊』（法政大学出版局、二〇〇八年）

注12 注11に同じ

注13 注4に同じ

注14 中村啓信 訳注『新版 古事記』（KADOKAWA、二〇一九年）

注15 天野哲也 他『ヒグマ学入門 ―自然史・文化・現代社会―』（北海道大学出版会、二〇〇六年）

注16 長澤武『ものと人間の文化史 124-1・動物民俗1』（法政大学出版局、二〇〇五年）

注17 李時珍 撰、鍼線 蔡烈 先撰、拾遺 趙學敏 撰『本草綱目五二

巻圖三卷奇經八脈攷一卷脈訣攷證一卷瀨湖脈學一卷附本草萬方鍼線
八卷本草綱目拾遺一〇卷』（錦章圖書局石印、一八八五年）

注18 注10に同じ

注19 石原明子『クマを飲む日本人―クマノイ（熊の胆）の取引調査』

（トラフィックイーストアジアジャパン、二〇〇五年）

注20 注11に同じ

注21 注15に同じ

注22 注15に同じ

注23 注15に同じ

注24 花部英雄「なめとこ山の熊」と狩猟伝承（『漂泊する神と人』三弥

井書店、二〇〇四年）

注25 注11に同じ

注26 野本寛一「なめとこ山の熊」と「金太郎」（『生き物文化誌』ピオ

ストーリー」五号、生き物文化誌学会、二〇〇六年五月）

注27 注24に同じ

注28 中村晋吾「断絶と饒舌―賢治童話の「擬人法」をめぐって―」

（『賢治研究』一〇九号、宮沢賢治研究会、二〇一〇年三月）

注29 広島市立中央図書館 編「赤い鳥 総目次」[https://www.library.city.](https://www.library.city Hiroshima.jp/kakarori/sakuin/index.html)

[hiroshima.jp/kakarori/sakuin/index.html](https://www.library.city Hiroshima.jp/kakarori/sakuin/index.html)（二〇二一年一月一七日最終閲

覧）

注30 小宮輝之『物語 上野動物園の歴史 園長が語る動物たちの140

年』（中央公論新社、二〇一〇年）

注31 注4に同じ

注32 木村盛武「慟哭の谷 北海道三毛別・史上最悪のヒグマ襲撃事件」
（『文藝春秋』二〇一五年）

注33 注32に同じ

注34 「御巡幸私記」（『朝野新聞 縮刷版』一四冊、ぺりかん社、一八八一

年九月二〇日）

注35 「御巡幸私記」（『朝野新聞 縮刷版』一四冊、ぺりかん社、一八八一

年九月二四日）

注36 堀尾青史『宮沢賢治年譜』（筑摩書房、一九九一年）

注37 岩松正「白熊」（『赤い鳥』一卷五号、赤い鳥社、一九一八年二月）

注38 ベルチャ・アドリアン「宮沢賢治「氷河鼠の毛皮」試論 登場人物

の位置づけからの考察」（『千里山文学論集』一〇〇号、二〇一九年

三月）

・引用した宮沢賢治のテキスト本文は、『新』校本『宮沢賢治全集』八巻

・一二巻（筑摩書房、一九九五年）に依拠した。

・日本語の引用文献は句読点を「、」。「。」に統一した。

・漢字の旧字体は可能な限り新字体に改め、旧仮名使いはそのまま引用し

た。
（かんだ さえ 二〇二一年博士前期課程修了）